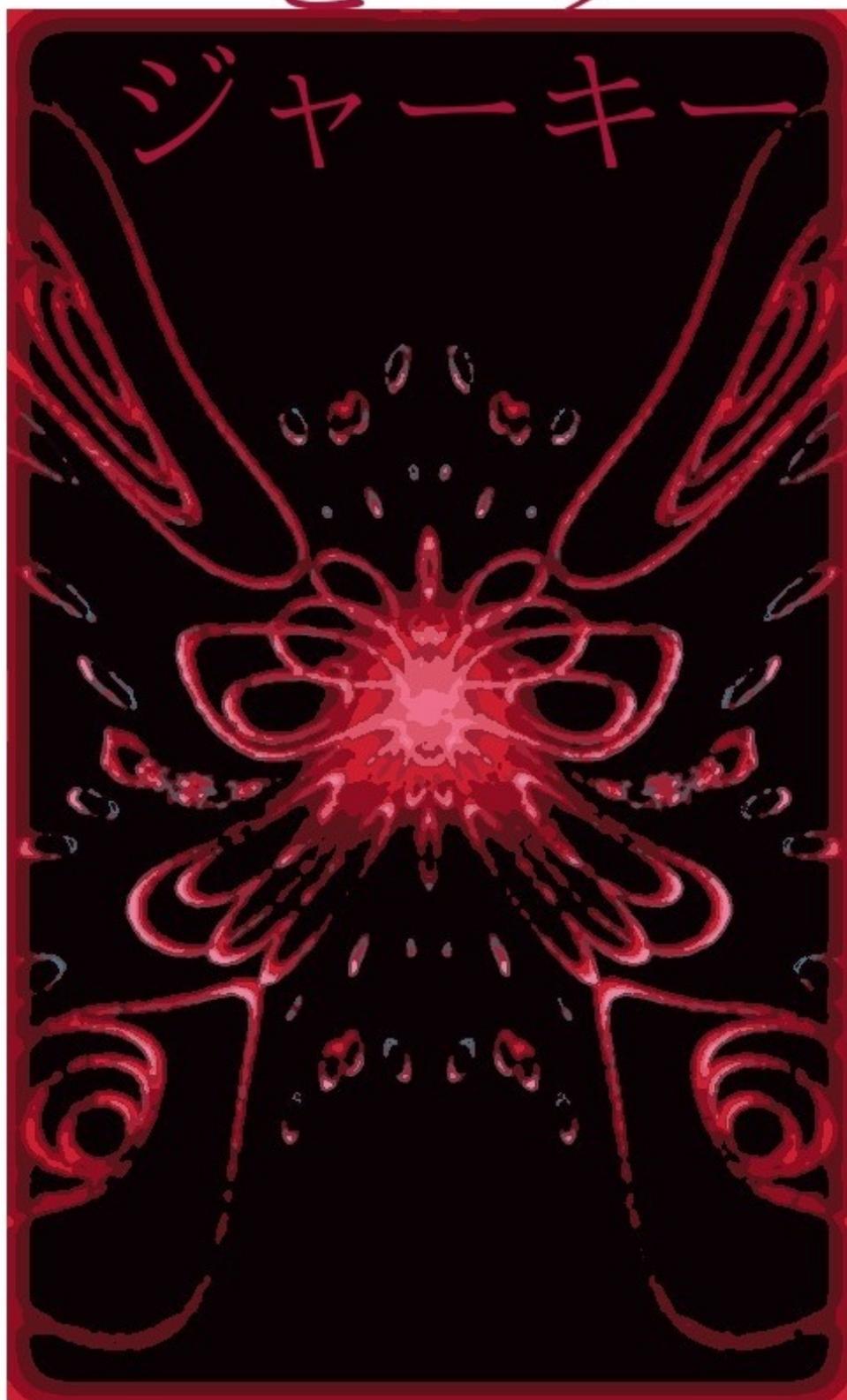


ビープ



mikatuki98

今日の麿子（まるこ）は一人ではなかった。新幹線の座席指定を取り、麿子の母と麿子の母の妹・綾（あや）叔母さんと三人で京都に遊びに行くところだった。正確に言えば、姉の家に遊びに来た妹の綾叔母さんを見送るついでに、一緒に列車に乗って京都へ遊びに行こうと麿子が提案した旅だった。

「だって家ってお寺でしょ。お寺と言えば京都じゃない。やっぱり本場を見ておかないとね。ねえ、綾ねえちゃん？」

叔母の綾は麿子が幼い頃は未だ独身だったので叔母ちゃんではなく、ねえちゃんと呼ぶ習慣が続いていた。

「そうかあ～？　そうかて、うちの住んでる近所は全然お寺なんかあれへんでえ～」

「う～ん、でも家に行く途中に有名所が色々あるやん！　見物しながら家に行ったらええやん！」

「それでもええけど……　麿子ちゃん、お寺なんて何処も同じやでえ～」

「いいのいいの！　京都のお寺は観る価値あるって！　あ、ちゃうわ！　拝観やね、ハハハ」

麿子は通路側。真ん中に麿子の母。そして窓側に叔母の綾が座った。麿子の実家のお寺は大分県にあるのでローカル線で福岡県まで行き新幹線に乗り継いだ。家を出て新幹線に乗るまで二時間も掛かったのに、新幹線が一時間も走ると麿子たちの乗った列車は徐々にスピードダウンして広島駅のホームに滑り込んだ。

『速いなあ～　もう広島かあ～　へえ～平日なのに結構人が並んでるわ……　ん？　黒い……着物？』

麿子がボンヤリと通路向こうの窓に目をやり、ホームに並ぶ人々の動きをボンヤリと見ていた。すると間もなく、麿子の鼓膜に張り付いて来るような奇妙な音が聞こえてきた。

「ヒタ・ペタ・ヒタ・ペタ・ヒタペタ・ヒタペタ・ヒタペタ・ヒタペタ・ヒタペタヒタペタ・ヒタペタヒタペタ」

『何！？　この音！？』

音の在り処を探し麿子の目玉がクルクルと動いている。どうも上の方からではなく下の方から耳に伝わって来る感覚がある。麿子の耳と目の機能がフル回転し始めた。

『わわわわっ！　これってもしかして……　草履の音！？』

麿子が音の正体を憶測している間も音は止まず、むしろ大きくなって行く。

「ヒタペタヒタペタ・ヒタヒタペタペタ、ペタッ！」

音が止まった瞬間、麿子の視界が真っ暗になった。

『うわっ！　ああっ！　草履！　コイツのだ！』

そう思った途端、草履の主は通路を隔てた麿子の隣に座った。

幸か不幸か真横の席なので麿子は首を直角に曲げて草履の主の正体をあからさまに確認する訳にもいかない。しかし聞いたことの無いようなしつこくも耳障りな草履の主が一体どんな人間なのか気になる。正面を向きながらも神経は明らかに真横の人間に集中したままだ。

仕方がないので磨子はやや視線を斜めに落とし、腰から下と座席前に付いている網カゴに延ばされる手で雰囲気を確認した。

『……やっぱり着物か。 黒い……という事は、僧侶？』

ところが草履の主は手にビニール袋をぶら下げて来たようでの、キオスクで買い込んだと思われる袋の中のビーフジャーキーをガサガサガサと騒々しい音を立てながら網カゴへ突っ込み、次に袋から取り出したプルトップに指を突っ込んでプシュ！ と景気よく音を立てて缶ビールを早く開けるや、グビグビグビッ！ と喉を激しく鳴らして呑み、ブハー——ッ！ と大きな息を吐いた。

呆気にとられる磨子。 たまらなく顔をかめたくなる磨子。 磨子は思い切って首をブンと振り真横を向いて草履の主の顔を見た。

『毛がふさふさの……坊さん？ 黒の着物は僧侶の証……てか、生臭？』

磨子は隣に座る母をこっそり突き、草履の主の方を見るように促した。 すると磨子の母は草履の主を見るや否やニヤリと笑い、伝言ゲームのように即座に隣に座る叔母のの綾へ知らせた。

「生臭やな……」

おっとりした京都育ちの叔母・綾の静かな反応だった。 静かと言えば、不思議なことに周りの乗客もその日に限ったように皆紳士淑女のように大人く座っている。 それに引き換え、草履の主である毛のふさふさ生えた坊さんの、ビールを豪快に呑みビーフジャーキーを貪り食う騒々しさと言ったらどうだろう。 草履の主を聖職者と分類すると、むしろ一般の人々の静寂さの方が神々しく感じられた。

その後、草履の主は二本目の缶ビールに取り掛かり、買って来たビーフジャーキーをほぼ完食するや勢いよく席を立ち、再びあの音を車内に響かせた。

「ヒタペタ・ヒタペタ・ヒタペタヒタペタ・ヒタペタヒタペタ……」

どうもトイレに向かって行ったらしい。 数分後、草履の主は用を足したのか、ドップラー効果のようにヒタペタの音が磨子近付いて来たなと思ったら、ドスン！ と座席に腰掛けた。

満腹になった草履の主はここで一眠りしたいところだろう。 「はぁ〜」と満足げな息を漏らすと、窓の方を見た。 ところがそれが運のツキ。 彼の隣に座っていた六十台半ばのおばさまが、僧侶だということで「ありがたや〜」と思ったのかどうかは知らないが、面々の笑みを浮かべて草履の主に話しかけ、それから延々おばさまの話は続いて行った。

トイレタイムが草履の主のおやつタイムの終わり合図だったのか、とりあえずは静かになったと一安心していた磨子は目を閉じて眠ろうとした。 ところが草履の主の食べたビーフジャーキーと缶ビール2本分の臭気が身近な席の磨子の鼻をつく。 それに話好きなおばさまの声が、今度は草履の主の飲み食いの音に代わりけたたましく車内に響き始めてこれまた五月蠅い。

『う〜〜ん、眠い…… けど、眠れんわっ！』

磨子は薄目を開けて横目で隣の二人組の様子をチラチラとみた。

『なんやおばさん、ホンマに嬉しそうやなあ〜 やっぱ、坊さんと話せるって幸せなんかなあ〜』

麿子は叔母・綾の仕込みの京都弁で呟いてみた。しかし草履の主はおやつタイムの時とは打って変わってポーカーフェイスだ。明らかに仕方なく話を聞いて、仕方なく相槌を打って、仕方なく相手をしているようにしか見えない。そのうち草履の主は真正面を見て耳だけおばさまの話聞くようになった。

『ああ、これは完全に無視やな…… まあなあ〜おばさんには気の毒だやけど、草履の主さんの気持ちも分からんでもないなあ〜 あんだけ呑んで食ったら眠くなるで〜 ほな、うちも眠らせてもらいますう〜 なんてね』

やっと麿子に本当の静寂が訪れた。

途中、麿子が新神戸駅で目が覚めた時、草履の主はまだ熟睡していたが、その隣でおばさまは沓え渡った目を丸々と見開いてチラリチラリと僧侶の方を見ては、さっきまでとは打って変わって退屈でつまらなそうな顔をしていた。もしかしたら草履の主は途中からタヌキ寝入りだったのかもしれない。目を覚ませばまた話し掛けられると思っていたのかもしれない。そんな疑惑さえ湧くかのように京都駅に駅に到着するや否や、草履の主はギリギリまで目を閉じていたのにも係わらず、すっと座席から立ち上がり、お決まりのペタペタを調子良く鳴らしながらさっさと列車を降りて行った。もちろん麿子たちの目的地も京都だ。草履の主のあとから列車を降りた。

今、麿子たちの前を草履の主は真っ黒な袈裟衣に身を包んで、足取りも軽く京都駅の階段を降りている。

『もしかして、ふんふんふんと鼻歌でも唄っているんじゃないの？』

と思えるほどの軽快さだ。

『ふ〜ん…… 何か陽気だね。それにしも、彼を待つ寺は果たして何処の何寺なんだろうね？まさか禅寺じゃないよね？』

大分の実家は禅寺では無いが、密かに禅寺に憧れを持っていた麿子は、草履の主の後姿を見送りながらも、本当はこっそり草履の主の後をつけてそれを確かめたいような気に一寸だけなった。

『いやいや、やめといた方がええわ。あんまり立派なお寺のお坊さんやったらショックが大きいわ……』

結局、最後まで草履の主をどうしてもお坊さんとは呼べない麿子だった。了